Column 文化・教育

フランス文化を日本に導いた福岡易之助

北　条　常　久
（あきた文学資料館　名誉館長）

フランス人の博物学者ジャン・アンリ・ファーブル（1823〜1915）の『ファーブル昆虫記』は、フランスより日本で有名である。それは、昆虫の観察記でありながら日本語の翻訳が文学的で楽しく読めるからである。社会主義者大杉栄が大正８年、豊多摩監獄収監中に「昆虫記」の英訳を読み感動し、11年に叢文閣より『ファーブル昆虫記』を刊行する。が、彼はその年第一巻を出しただけで、国際無政府主義大会に参加するために国外に脱出してしまう。それで同年フランスに長く住み帰国したフランス語が堪能な椎名其二(二〜四巻)とフランスに10年住み、大正８年に帰国していた小牧近江(九巻)等が後を継いだ。

その小牧近江(「あきた経済」2018年2月号で紹介)、椎名其二(同2019年5月号で紹介)が『ファーブル昆虫記』の翻訳時に重宝したのが、『模範仏和大辞典』であった。二人は、フランス語の単語や用法には困らなかったが、長いフランス生活で日本語が怪しくなっており、フランス語は分かるが、日本語ではどう表現するのか不安で『模範仏和大辞典』を活用した。私は、その打ち明け話を直接小牧から聞いた。くしくも、新潮社記念文学館（仙北市角館町）では2019年10月29日〜2020年４月３日、「ファーブル昆虫記を訳した椎名其二展」が開催されている。

その大辞典は福岡易之助が設立した白水社が、大正10年に出版した日本最初の本格的フランス語辞書である。フランス語辞書はそれまで何度も企画されたが、編集者を揃えることが困難であるとともに、フランス語が英独語のように普及していなかったために販売後の採算が見通せなかった。

しかし、社長の福岡易之助自らが編者責任者となり、その他、柳川勝二、広瀬哲士、折竹錫、荒井恒雄、石川剛、内藤濯、池田立基、太宰施門、山本直文が編者として加わり、三六判、2,176ページ、収録語数55,480語、定価８円の『模範仏和大辞典』が６年かけて刊行された。同年、易之助は、フランス文化研究と普及により、フランス政府よりレジオン・ドヌール勲章を受章し、大辞典は大正天皇にも謹呈された。

その福岡易之助は、秋田県平鹿郡福地村深井(現横手市雄物川町)の造り酒屋で、二百町歩の小作地に広大な山林を持つ素封家の長男として明治18年に生れた。彼は、浅舞小学校から明治32年に横手中学校に進み37年卒業し、同年一高に入学し、さらに東大文学部仏文科に進学し

43年に卒業した。彼の東大在学中は、38年夏目漱石「吾輩は猫である」、39年島崎藤村「破戒」が刊行され、40年には「新思潮」、41年には「アララギ」が創刊され、日本文学の夜明けであった。易之助は卒業後洋行してさらに文学を続けたいと強く願った。

しかし、東大在学中父に死なれ、大地主の長男は、家を守るために帰郷せざるをえなかった。しかし、彼は、秋田の田舎でも日本の未来は開けると決意して帰郷した。それは、彼が卒業した明治43年は武者小路実篤、志賀直哉、有島武郎等による「白樺」が刊行された年であった。後に武者小路は、宮崎県児湯郡木城村に「新しき村」を設立し、有島武郎は北海道の狩太(ニセコ)の私有農地を小作人に無償で解放する。

福岡易之助もフランス文学から日本の農村の矛盾に気づいていた。フランスでは地主と小作人は、秋の収穫が終ってから話合いで小作料を決めた。日本では春から小作料は決められており、凶作でも約束の小作料は徴収された。

易之助が帰村してみると、村人には元気がなく彼等の生活は沈滞していた。小学生時代の友達の顔色もさえなかった。彼は農村を巡回して産業を拡大する新農村運動を提唱した。彼も実際に農耕作業にも手を染めたが、元来が虚弱な体質で鍬を持つ手に力が入らなかった。自分の家の庭には、整備した鶏小屋を作り、レグホン、コーチンから七面鳥まで飼い、米の単作農家に養鶏を薦めた。さらに農業の改善のために出羽丘陵を開墾し果樹園を開設した。秋田県は、石川理紀之助の指導で明治28年に秋田県農会を設立し、森川源三郎等と秋田果実組合を立ち上げ、リンゴ、ナシの栽培を普及させた。

易之助が帰郷した年に、同じ福地村出身の佐々木良助が28歳という若さで母校の福地小学校に校長として着任した。二人は意気投合して、村の教育はもとより文化、産業の進展を約束した。易之助は、学校に出向き、父兄にも講話をし、子どもたちにも自分が読んだ本の話をして学校に多数の本を寄付した。ついには、校庭として1,600坪の土地を寄付した。そこで学んだ鈴木安太郎は地元の青年運動で活動し、さらに武者小路実篤の「新しき村」に入り、昭和３年に福地村に帰り、合併の雄物川町の助役として農村建設に尽力したばかりか、後に彼が福岡易之助の評伝を書く。福地青年団は優良青年団として全国でも知られ、戦後は福地集落農場協議会が県の農業振興のモデルとなった。

易之助は、農民たちから推されて大正３年に郡会議員に立候補し当選するが、10日間の村を二分した醜い選挙戦で、彼はすっかり地元農村での生活に嫌気がさしてしまう。さらに当選してみれば、それまで自分が自由に農民のために尽くしてきたことが、今度はそうは行かない。小作料を軽減することも学校への寄付も反対派の議員からは売名行為にしか受けとられない。彼は農民と農村の発展のために議員になることを決意したのであるが、すっかり失望してしまう。彼は旧家の係累や村の因襲から自由を求めて議員を辞職してしまう。

易之助は、家族を説得し、親族の反対を押し切って上京し、フランス文化を日本に紹介し、日本の農村発展に寄与しようとした。現在の白水社はフランス文化の紹介を中心とした教養派の出版社で知られるが、発端は農業関係の書を出版し農村発展を目的にした出版社であった。